

研究発表4 -

不登校・家庭内暴力を呈した高校生に対するピア・サポートの取り組み

藤本扶美子¹⁾ 北島朝子²⁾ 亀井千賀子²⁾ 渋谷武³⁾ 石崎直樹⁴⁾ 太田秀造⁵⁾

1)心理士 2)看護師 3)精神保健福祉士 4)介護福祉士 5)医師

札幌太田病院 思春期デイケア課

1.はじめに

当院では、思春期症に病棟内内観療法、ピア・サポート、遊戯療法(小弓道、ミニダーツ)など、多角的治療を実践している。今回、不登校・家庭内暴力を呈した一高校生に、以上の治療が奏効し、復学が可能となった。ピア・サポートの効果について検討したい。

2.症例紹介

A氏。男子高生。主訴：死にたい、不登校。現病歴：小学3年時いじめられから不登校。小学5年時両親離婚、母と2人で転居。高校進学後、精神不安定となり、再び不登校。X-3年、精神錯乱状態となり、眠剤を多量服用し自殺未遂となった。X-2年、多量服薬し2度目の自殺未遂。X-1年、母への家庭内暴力出現、警察沙汰となる。同年、多量服薬し救急病院に搬送、当院紹介され受診。

3.治療経過

外来通院、思春期デイケア(以下DCという)で治療を開始。不規則な生活が続き、DC開始3ヵ月目、興奮状態を呈し入院。1ヵ月半の入院治療では、病棟内内観療法、遊戯療法、ピア・サポートの会の参加を通し、良好な経過を示す。退院後は再びDC通所をしつつ、復学の準備を開始した。ピア・サポートに関心を持ち、入院者に対しての傾聴活動を行なう。小弓道、音楽療法を積極的に手伝った。将来の目標が明確化し、退院後1ヵ月半のDC通所で、登校可能となり進学の継続に至った。

4.考察

1回目のDCでは、いじめられ体験から対人交流と自己表現が乏しかった。入院中のピア・サポーターとの関わりは、仲間に受容、肯定される交流から、不安が軽減され、治療意欲が向上し、2回目のDC通所が容易になった。また、自らのサポーター経験が、「傾聴する」「他者の立場で行動する」契機となり、自己肯定、他者理解と繋がり、母への暴力が軽減した。以上のピア・サポートを中心とした多様な治療により、目標が明確化され、復学が可能になった。

5.まとめ

段階的なピア・サポート支援の導入により、具体的な行動目標の設定が可能となった。支援者だけではなく、受療者が自身の課題、治療の経過を認識することで、自他を分析し、理解し、受容する過程を通して、人格成長の一助に繋がった。現在当院では、日本心身医療研究会を発足し、受療者の趣味や特技を活かしたピア・サポート活動を積極的に行っている。これら活動から、意欲の向上や自己実現への欲求を高め、就学・就労に役立つ、明るく楽しい支援を目指したい。